

令和7年度第1回さいたま市アーバンスポーツ研究会 議事録

- (1) 開催日時 令和7年6月10日(火) 14:00~16:00
- (2) 開催場所 ときわ会館 5階 小ホール
- (3) 出席者 岩原委員(副会長)、鎌田委員、小林委員、佐藤委員(会長)、
田中委員
欠席者 松田委員
- (4) 議題 ①令和6年度までの取組実績、令和7年度の取組計画
②アーバンスポーツの活性化に向けた公民連携
③ルール・マナー普及啓発チラシの改訂
④アーバンスポーツができる場所の整備
- (5) 公開・
非公開の別 公開
- (6) 傍聴者の数 0人
- (7) 会議資料
・次第
・資料1 さいたま市アーバンスポーツ研究会委員名簿
・資料2 さいたま市アーバンスポーツ研究会設置要綱
・資料3 議題関係資料
・資料4 ルール・マナーの普及啓発チラシ
・資料5-1 ルール・マナーの普及啓発チラシ改訂(案)
(初心者・子育て世代の親子向け)
・資料5-2 ルール・マナーの普及啓発チラシ改訂(案)
(既に取り組んでいる人向け)
- (8) 議事内容
※議題③④については、後日の意見照会に代えることとされた。
- ① 開会
スポーツ文化局スポーツ部長より挨拶
- ② 議題-(1)
令和6年度までの取組実績、令和7年度の取組計画
■ 資料説明

事務局より、資料3に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

市のターゲットは子育て世代の親子で、そして未経験・初心者をターゲットにしている。国も言っている週1回スポーツ実施率を増やすときに、子育て世代からアクションができたら市全体として、週1回のスポーツ実施率が上がってくるのではないかという方向性を持っている。

取組みの3つの軸がある。1つ目は初心者をターゲットにしながらの競技振興。スクールキャラバンとアバスポさいたまという体験イベントがあり、ともに今年度開催数を増やしている。スクールキャラバンをきっかけにアバスポさいたまに来てくれたというような関連性でやっている。2つ目がルール・マナーの周知。イベントでチラシを配り、チラシ以外のオンラインを使った広報をしてきている。3つ目は場所ということで、野田小のプールは、場所を作ったのでよりよく使っていただけるような工夫として、昨年いただいた助言をもとにそこを使った教室のようなこともやりました。また、新たな場所整備の企画がある。

ではまず、競技振興の観点からはいかがでしょうか。

【鎌田委員】

イベント開催地近くだけに周知するような狭いエリアではなく、範囲を広げて伝えることで、距離の差はあったとしても参加する人は増えるのではないか。その結果、参加しやすい環境になり、継続希望のアンケートの回答もより変わってくるのではないか。また実施方法も「スクールの参加」「体験イベントの参加」「アーバンスポーツができる場所で自由に実施」と一定数あり、今後、場所整備していくにあたって、満足度の高いものができれば市民の方にも理解してもらえるのではないか。

今日の議題の中で、公民連携の話もあると思うが、一方、アバスポさいたま・スクールキャラバンを行って、さらに参加したい人たちの受け皿として、例えばできる場所の整備や、広報といったところは行政が協力して動き、講師の派遣などは、民間が協力してやってもらう。皆さんに入りやすいので、幅広い入口としてアバスポさいたまは絶対あるべきだと思う。ただ、その先につながっていない。今後の形として市内外問わずこういう計画の民間事業者を発掘していくのであれば、例えばアバスポさいたまに来ている講師が、もっとやりたい子たちの、スクール形式のような場を与えるというのも、1つの手ではないか。それが結果的に継続する形になっていけば、自ずとスポーツ実施率は向上していくのではないか。その中で子供のみならず、親御さんが参加する機会もできる。田中委員は、親御さんも一緒にやりましょうという一声がある。ただものがあって、ご自由にどうぞと言われても多分やらない。置いてあるだけでは何が楽しいのかも伝わらない。もちろん教える講師も大事ですし、この方に教わりたいという親御さんからの意見は結構聞く。行政は親御さんが安心して取り組める場所と周知を徹底的に協力する。その場所を民間の力を使って活用しながらよりフォローして関係を作っていくことであれば、公民連携の形がますますスタート切れるのではないか。

【田中委員】

イベントの回数が増えるのは、「見る」「知る」機会が増えてとても良いことだと思うが、イベントの内容・質の部分で、低下している部分があると感

じていたところがあった。ファーストコンタクトで初めて触れたときに、楽しかったら良い印象になるし、「なんだこんな感じか」だと、次に繋がらないと思う。

【鎌田委員】

どうそのスポーツを楽しんでもらうか。楽しくなければ、次には繋がらないからその環境をどう作るのか。「ボールが置いてあるからサッカーボール蹴っていいよ。」では、多分サッカーをやりたいと思う子は少ないと思う。何が楽しいのかっていうことが伝わるからこそ競技に携わりたいと思うはず。1回やつたら次もやりたい。ちゃんと習いたいとなるような環境にしていくことが非常に大事なことなのではないかと感じた。

【佐藤会長】

学校へイベント広報を増やすときに、大規模校・小規模校等によってそれぞれこういうことを重視すると効果的ではないか等のアイデアはあるか。

【鎌田委員】

今までのスクールキャラバンの取り組みの中では、全体の生徒数が少ない学校だと極力全校生徒を対象にして、大規模校になってくると、対象の学年を絞って行っている。講師の人数や対応できる人数にもよる。

【佐藤会長】

新しく、橋の下に整備をするというところで、どちらかというと使用者の自立的な使用と場の管理を原則としているように思うが、気を付けるようなことなどご意見をいただきたい。

【小林委員】

昨年現地に足を運んだことがあるが、D区画とJ区画がユーザーとしては、似たような方を対象にしているが、場所は離れているので初心者はJ区画で中級者はD区画となるのか、その間の移動がどうなるのか、使い勝手はどうなのか等、非常に使いづらいと言わざるを得ない。今度新しく整備するJ区画は、I区画が駐車場となっているので、I区画に停めてその間は道具を使わず移動するように促せば、みんなも守りやすいと思う。現状、D区画のほうに行ったときには周辺に路駐している。そういうところからすると、ちょっと配置としては良くないと現地に行って思ったが、使える場所が限られて、使える用途も、もうすでに作ってしまってあるとか、いろんな事情があり難しい中ではあるが、ここにバンク to バンクだけあるような場所を作つても、誰が行くのかという心配はあります。周辺は、畠や田んぼで何もない。夜は真っ暗だから、子供が行くとなると子どもを持つ親としては、怖いなという印象はある。

昨年度のアンケート結果について、5,782名は全ジャンルの総数なので、それぞれのジャンルを何回実施して、平均参加人数が何人なのか、それぞれのジャンルに参加する方はどの地域が多いのか、そういったところが分かると、参加者の分布がわかる。その分布の中からこの地域に来てくれそうな方が割合としてどのぐらいいるかという利用者想定みたいなもの、そういった基礎データをもとにして、どの立地だとどのくらい使っていた方がいるのかを考えながらやっていただけるといい。逆に、この新見沼と三橋を作った場合に、その参加者の中でどのくらい、どのスポーツで参加する方が多いのか。それによってはJ区画の使い方が、ダンスとか、スラックラ

イン、けん玉など、ローラースポーツではない可能性がもしかしたらあるかもしれないで、この平面にバンク to バンクが正解なのかと思うことはある。

【鎌田委員】

最初はセクションがなくてもいいと思う。例えばアバスポさいたまなどに参加され、さらに1歩踏み出してやってみたいと思う方たちにとってはちょうどいいサイズと思う。どの種目でも1時間なら1時間のしっかりとしたスクールを受けにJ区画に来る。そういう方にとっては、環境として広さ的にはちょうどよいのではないか。ただ、中級者に向けてとなると手狭である。

【田中委員】

良い子が悪い子になってしまふ瞬間、それは良い子を悪い子にしてしまっている瞬間。店で、小銭がバラバラと出しち放しにしていたら、普段取らない子も取りたくなってしまう。私はやられてしまう方も悪いという考え方を持つようしている。だから、駄菓子も売っているが、撮ってないダミーのカメラを置くようにした。大人が子どもたちを悪者にしないように計らうことがとても大事なことだと思う。だから、ごみ箱を置くなど、できることはしてあげたいと思う。

【小林委員】

現状のD区画へ視察に行ったとき、グラフィティなどがあり、あまり雰囲気は良くなかった。たぶん初心者だと入りづらい。ただ、良いコミュニティをつくるには働きかけが必要である。

議題-（2）

アーバンスポーツの活性化に向けた公民連携

■ 資料説明

事務局より、資料3に基づき説明

■ 意見交換

【佐藤会長】

協力者ということで、それを太くというか、増やしていく、あるいは長く・広範囲にしていく。市もかなり広いですから、場所はある程度行政に頼らないと、ということになりますかね。行政に求める場所の提供としては、例えば専用のアバスポ場所を作るほかに、野田小学校のようなプールの再活用というケースもあると思いますが、専門の立場として、こんなところに行政が提供してくれたらと思う場所はあるか。

【鎌田委員】

ローラースポーツじゃないコンテンツももちろん存在する中で、例えばダブルダッチ、フリースタイルけん玉、ダンス等々あると思うが、本日のような会館の1室とかでもできると思う。それが、どこかの体育館でも別にいいですし、このぐらいの広さがあれば十分にそういうレクチャーができるという環境もあるので、そういうった場所を少しずつ行政の協力を得て開放していく、民間の方が、しっかりとしたレクチャー・スクールを行っていくのが1つの手段だと思う。とはいって、いきなりそこで始まりますとなったところで人が来るわけではないと思うので、スクールキャラバン・アバスポさいたまを通じて案内していくことも大事だと思うし、そこは行政の力をいた

だきながら、そういった子供たちへの周知につなげていくことによって、民間としても参入しやすい環境になっていくのではないかと思う。体験で教えてくれた先生たちが、実は市内では教えている環境がないという状況だと思うが、この先生に教わって楽しかったからやりたいということはすごく大事だと思う。それが、教えてくれた先生ではない民間事業者に行くのでは全然意味が違う。結果やめてしまったでは、継続的な取り組みにはならないと思う。しっかりとその規模、基礎をしっかりと築いてあげることが大事なのではないか。

【小林委員】

さいたま市は、部活の地域移行はどのように進んでいるのか。というのも、静岡では、インラインスケート部を他学校連携でつくっており、そこに今山梨、神奈川も参加している。部活の地域移行と割と近い話なのではないかと考えた時、やりたい子どもたちがアバスポさいたまにたくさん参加するのはもちろんだが、誰が主体になって取りまとめをしてくれるかが大変である。地域によっては、担当できるジャンルを取りまとめる人がいなければ難しいと思う。野田小のイベントで手伝ってくださった講師は、元々浦和美園の体育館で教室をやっている土台があるため、他で出張してやることで、教室勧誘できる受け皿があるから良いが、その受け皿がない講師がイベントを行ったときに、講師のもとで続けたいなとなっても普段やっている教室がないため続かない。そうするとアンケートの中で、約3分の1がスクールで継続したいと回答している人たちが、続けることが難しいということになってしまう。なので、スクールや教室に参加した子どもたちと、一緒に責任をもって取りまとめてくれる大人の存在が、どの地域にどの種目でどのくらいいるのかという情報集積が大事かと思う。

【鎌田委員】

今まで作ってきてているアバスポさいたまの形として、来てくれている講師たちが、行政としっかりと意思疎通ができる取り組めるのかが大事なのではないか。例えば、それぞれのジャンルによって、そこに特化した講師はいるとしても、小林さんが言うようなトータル的に、いろんなスポーツがある中で、総合的に見る人というの多分なかないと思う。

【小林委員】

最初はそれでいいと思う。ただ、複数ジャンルでも最低限こういう安全性は担保するなど、質がバラバラとなってしまうのは違う。継続的にスクールをやっていると、スクールの生徒たちの中から指導者として育っていく。その人たちを、次の指導者としていくサイクルが、適齢の子どもたちが来ると、3年から5年くらいでできる。もちろん、新しい指導者がすべてを教えられるわけではないので、核となる指導者が最低限の指導・交流を担保させながら育てるという仕組みを、どこかでスタートさせていかないと指導者は増えない。

【鎌田委員】

その土台や基礎は、いまアバスポさいたまに携わっているメンバーでも十分に作っていける。だから、行政と連携しながらその環境を増やしていくのかどうかということが、先ほどの意見の1つ。小林委員が言う通り、そこでやってきた子たちが今後育っていく中で、きっとその子たちが次世代を担っていくメンバーになると思う。中にはそこから本当に世界を狙える子たちも

出てくる。それはすごく理想の形であって、そういう子たちが育ってくることによって活性化していくことにつながると思う。ただその機会を作るためには今、どうしよう、どこ行ったらいいのか、という人たちが溢れている環境をより拾ってあげないといけない。常に市民に寄り添えるのは行政しかいないと思っている。そこの環境をどう整理していくか。あとは、民間の力を使いながらいかに連携の形を築いていけるのかが重要である。もちろん次世代を育成していくことも含めてだが、結果的にその参加したのがスクールキャラバンやアバスポさいたまということになれば、一番だと思うので、そこを目指していくのが1つだと思う。

【佐藤会長】

アバスポさいたまは今まで、講師の方と受講生しかいなかつたが、もう1人違う関わりの方々を、呼んでみたらどうかというようなニュアンスかと思っている。まずアバスポさいたまで、いろいろなスポーツを実施し、ある種目をもうちょっとやってみたい子たち向けに、行政が整備した場所で、指導者講習会的な機能をアバスポさいたまが持ち、その認定を受けた講師が行うアバスポさいたま公認スクールみたいな形で実施する。さらにある種目を深めようと思った方は、講師が自身で営業しているスクールへ行く。ただそのときに、同じ志を持ってくださる方じゃないといけないので、起点はアバスポさいたまになる。市民のメリットとして、市のイベントに参画しているような業者或いは指導者であれば安心があげられ、アバスポさいたまがブランドになり、保証書のような機能を持つようになるかと思うがどうか。

【小林委員】

佐藤会長の話された内容は、多分行政としてはリスクーなところがあると思う。各ジャンルの公認や技術的な部分・事業者の育成の部分は、それぞれのジャンルの中で、指導の講習会やスキル認定等はあるので、アバスポ公認と言ってしまうと、王道の指導資格や認定資格みたいなものと、何が違うのかとなるで、そのあたりは気を付けた方がいいかと考える。また、認定スクールとしたときに、そこで問題が起きたらさいたま市は責任を取るのかという話にもなるので気を付けた方がよいと思う。例えば、さいたま市としてはアーバンスポーツをやる方たちにこういうことを期待して、技術的なものやジャンル特有のものとは別に、指導者には最低限こういうものを守ってもらうということで、講習を受けた人が講師としてスクールを行うならまだよいかと思う。大人として指導者として、子供たちに対してどういう責任があるのかをわかってもらうことが大事だと思う。

【田中委員】

必要なのは、専門的なスクールで技術を教える人ではなく、一つ手前の体験スタッフの講師を、子どもたちが体験を満足して帰ってもらえるようことができる人として育てていくことと、全体の部分で、今回のイベントが4競技だとしたら、この4競技全体を、イベント全体を1人が統括として見ることができる人も育てていくことがすごく大事なことだと思う。

【鎌田委員】

全国いろいろな所へ行き、それぞれ地域の課題などを見ながら試行錯誤してより入りやすい環境や楽しませる環境を作ってきて、大事だと思うのは、1回目で楽しんでもらうことである。

【小林委員】

子どもたちの気持ちも大事だが、親がこの講師にならうちの子を預けても良いと思ってもらう必要があると思う。

【鎌田委員】

体験会やスクールキャラバンを見に来られた親がどこで教室やっているか聞いてくることが、ここ数年増えている実感がある。

【小林委員】

先ほどの佐藤会長の話は、安心して続ける、任せられる人を育てていくということと、続けたいという人が多いところに、高架下や公園、市が持っている施設で使用されていない空間等に、場所を作っていくということにつながるものと考える。

【鎌田委員】

理想は、さいたま市が10区あるから、10区それぞれにあることだと思う。各区のカルチャーコミュニティーの方たちが、1年に1回交流できる機会があるなど、コミュニティが、それぞれの交流から形成されていくことが、理想の形ではないか。

【小林委員】

いろいろな地域の行政と話をすると、アーバンスポーツをやりたくなって近所で探すが場所がない、だけど近くの公園などへ行くと、おじいちゃんたちが、グランドゴルフで占有している場所があるから貸してもらえない、体育館や公民館も埋まっていて使えないなど、やりたい気持ちが出てきた人たちの最初の行政との壁はとにかく場所がない、使いたい場所が使わせてもらえないということである。使いたいと思う人たちの気持ちを形にすると、アバスポさいたまやスクールキャラバンでやりたい気持ちになった方の、最初のきっかけづくりになるのではないか。できれば学区内が好ましい。

【鎌田委員】

理想ですよね。通いやすい、親も行かせやすいという形、またアクセスも含めていいところというのは、非常に親としても安心できる。

【田中委員】

これが根付いてきたら、他県からさいたま市に引っ越したい、もうここで体験会とか指導とかをやっていきたいというような、いろんな競技で人が集まってくる話にも発展していくではないか。ポジティブな話だと思います。

【小林委員】

例として、静岡県の富士宮市でインラインホッケーをやっている方たちは、体育館等では床を傷つけてしまうため、ある会社のアスファルトの屋外駐車場を使って活動しているが、雨が降ってもできるように体育館で活動したいために、段ボールでホッケーの道具を作つて行うことで交渉し、実現している。だから、やりたい人と管理者の人が、どこが問題でどういう形であれば使えるのか話をすることが大事だと思う。

【佐藤会長】

アバスポさいたまに参加した子たちが、続けたいと思った次のステップとしてあるのが、各講師・業者の方々がやっている教室となっているのが現状で、そこには物理的な距離もあるし、心のステップもあるので、何かつなぐようなイベントを少し考えたほうがいいだろうということ。ただその時は、場所の提供は行政が用意し、そこを使わせてもらって、アバスポさいたまに

協力をしてくださって方針を理解してくださっているような講師が、市の場所を使って、自身の簡単なスクールをやる。あとは子どもたちそれぞれの選択で、趣味としてやるのか、競技者としてやるのかにより、講師自身が運営している教室に行くのか、自分の家の周りでやるのかとなるが、アバスポさいたまの次のステップをもう1つ、階段を考えてみても良いのではないか。ただその時に、いろいろな人がいるので、市のリスクも考えて企画していく必要があるということで、今関わっている人以外で、ご理解ある方がいたら、来ていただいてどこかの施設を使って、ご自身がアバスポさいたまに来た人を中心に、そこで広報して構わないで、自身の責任下で、スクールをやっていただくというようなことも、試験的なものとしてあってもいいのではないかと感じたところです。

【事務局】

時間の都合上、議題（3）（4）については後日、意見照会とする。

【佐藤会長】

以上をもって、本日の議事を終了する。

③ 閉会

④ 意見照会

議題-（3）

ルール・マナー普及啓発チラシの改訂について

【佐藤会長】

・日本スポーツ協会の「行動としてのフェアプレー」「フェアプレー精神＝日常生活の中の自分の行動に『フェア』を心がけること」を参考に、後者の趣向を、多めに取り入れてはどうだろうか。

・「ルール・マナーの育成」は上記を強調していることを“大人＝保護者”に理解してもらう。

・それ（フェアプレー精神＝日常生活の中の自分の行動に『フェア』を心がけること）を「保護者から子どもに指導して欲しい」旨を強調する（保護者は子どもに“良い大人”的見本を見せて」など）。

・「これを減らさないと、活動場所の確保などの普及活動が難しい」（マイナス要素を減らせない）、「大会開催のスポンサーなどが集まりにくい」（プラス要素が増やせない）、ことを浸透させる。

・「自分さえ」という人は少ないだろうが、「自分はきちんとしている」が多いのでは。とはいえる、「見知らぬ人に教える」はばかりがあるだろう。「見本を見て」なら気楽にできるのではないだろうか。

・上記を含めると、そこそこの文量となるので、両面でもいいのでは。

【岩原委員】

・チラシの改正について、初心者の方のマナー普及や、地域の理解も得やすくなる内容だと思います。

・実績のある現在も活躍されている選手の理事の方からのコメントなどものついたら、初心者のかたも情報を検索したり、今すでにやっている方も尊敬する方からのコメントがのっていると効果できではないかとおもいました。

【鎌田委員】

- ・初心者と既に取り組んでいる方向けの 2 種がありますが、配布はどのように考えていますでしょうか？
- ・法的な位置付けについては、初心者・既に取り組んでいる方関係なく記載があった方がいいかと思います。
- ・既に取り組んでいる方向けにもパーク情報など記載があった方がいいかと思います。

【小林委員】

- ・原案はまだイメージが湧きにくいので、レイアウト、デザインが固まってきてから判断したいですが、初心者用、すでに取り組んでいる人向け、と分けなくてもいいかと思います。
- ・初心者、子育て世代向けの方でも「格好よくやろう！」と濁さずに、「ルール・マナー」という言葉を使い、ルールとマナーがある、ということをしっかりと伝え、読まなければいけない、と思ってもらう方が良いです。法的な位置付けも初心者でも知ってもらった方が良い、保護者は尚更→よって、分ける必要はないと考えます。
- ・表面で「ルールとマナー」を繰り返す必要ないので、デザイン的なレイアウトを心がけていただければ良いかと思います。

【田中委員】

- ・競技者同士よりも、近隣への配慮を大事にすべき。
- ・「来たときよりもキレイにしましょう」は、押しつけ感があるが、大事なことなので、「～心がけましょう」という言い方をよくしている。
- ・順位とか、上手い下手が評価基準ではなく、あの滑り方かっこいいという「スタイル」が大事、楽しみ方が幅広いことも伝えたらよいかも。
- ・競技の手軽さ「路上でできる」とは書けないけど、それくらい手軽でできるスポーツということを紹介すべき。

【松田委員】

- ・野球やサッカーのようなルールがない自由度がある。
- ・仲間同士での教えあいなども自由度の高い要素といえるのでは。
- ・やってはダメなことを大人の文章で明確に伝える。
- ・決められた場所でやるように促す文章を明記すべき。

議題- (4)

アーバンスポーツができる場所の整備について

【佐藤会長】

- ・上級者や熟練者は、それなりに活動場所を確保できているのではないだろうか。「初心者＝事始め」の人が実施できる場所を提供する意図を「少し、強く」してはどうだろうか（上級者・熟練者には「使えないことはない」程度）。
- ・「子どもと保護者が来る」ことを意識し、保護者が待機（「座って見守る」など）する場所などの確保。
- ・「年下の子ども＝まだアーバンスポーツができない年齢の子ども」を連れてくる可能性への配慮（例えば、遊具などの配置）。
- ・良識のある業者の看板設置などを認め、その費用を上記に充てることはできないか。
- ・「アーバンスポーツ」はかなりの速度で変化する可能性がある（種目が増えたり、人気種目が変わったり）。それらに「ある程度」対応できる可変性を持っておくべきでは（「この種目だけ」「あの種目だけ」という不公平感を生じさせないため）
- ・「ルール・マナーの啓発」の観点から「使用一時停止」のルールを定めておく。

【岩原委員】

- ・前回のお話しの中で、夜間の活動をする際に周りが暗いとおっしゃっていたので、安心して初心者でも参加できるように、選手の怪我や安全管理面でも照明の設置はをし、十分な明かりを確保する必要性があると思いました。

【鎌田委員】

- ・一部意見として、研究会でも意見がありましたが整備予定地はどのように選定して場所の候補が出てるのでしょうか？
- ・複数の候補地がある場合、その場所がアバスポ参加者や既にアーバンスポーツをしている方にとっても行きやすい・入りやすい環境か？も含め研究会もしくは個別に意見を取り入れた上で計画にしたほうがいいかと思いました。
- ・アバスポの実施場所やこれまでの取り組み場所と全く違う場所では足を運ぶ方も少なくなってしまう可能性があることと、計画地にどのような形で誘客するか？定期的なスクールなどの検討も踏まえ場所については検討したほうが中長期的にその場を利用してくれるユーザーも増えるのではと思います。ただ、場所が余っているから計画地にするのではなく、市民の皆様にとって使用しやすい環境も含め検討できればと思います。

【小林委員】

- ・県警が近く、周囲に住宅が少ないとから周辺環境は良いと思います。敷地内に駐車場とトイレがないので、隣接する公園の駐車場やトイレの行き来で道路を横断したり、滑走しないよう注意が必要。
- ・当初は初心者向けの整備を行うということですが、すぐに上達する人たちが出てくることは容易に想像できるため、中・長期の整備イメージをたて、運営をして行く中でセクション等の充実を図れる道筋を考えておく方が良いかと思います（運営受託者もしくは利用団体主体で）。

・ルールマナー、普及啓発を目的の一つとした場合、利用ジャンルごとの取りまとめとスクール・体験会等は不可欠。使い人たちのコミュニティの創発、育成を。

・非舗装面の状況が気になります。砂利や土の場合は、滑走面に簡単に石が入り込み転倒の危険が増えます。雨でぬかるむ場合は、滑走面が荒れやすくなります。

【田中委員】

・「〇〇をやつたら利用一時停止する」だと〇〇をやらなければ、停止されないと思われかねないので、事象を限定するのではなく、曖昧な形で利用停止することを掲示するべき。

・近所の方や公園利用者等に現状や懸念点などを聞き取りに行く。

・こどもの遊具ゾーンによくあるゴムチップ性の地面であれば、物理的に滑れないが、初心者には転んでも衝撃は少なく、怪我のリスクが抑えられ向いているかも。

・止まって練習するゾーン、滑らない練習ゾーン（手すりを用意して）。

・SNSをつかった周知、意見聴取。

【松田委員】

・屋内はコンクリ、屋外はアスファルトのイメージがある（水はけの問題）。

・人工芝は管理が大変なので、ジョイント式なら可能か？

・セクションとしてクオーターランプが両端にあるとそこを使ってスピード感ある滑りができるかも。

・ほかのセクションとしては、バンク、ハーフボックス、フラットレールがあるとよいかも。

・ベニヤ板より専用の素材を使用すべき（管理の問題や怪我のリスクを考慮して）。

・奥まった構造になっているため入口に看板をつけるなど、入りやすい雰囲気づくりや駐車場の案内などの周知が大事。

・3on3用のバスケットゴールを1つ設置する。

（9）問合せ先　　スポーツ文化局スポーツ部スポーツ政策室

TEL 048-829-1737

FAX 048-829-1996